

京都大学教育研究振興財団助成事業
成 果 報 告 書

2022年 8月 16日

公益財団法人京都大学教育研究振興財団
会 長 藤 洋 作 様

所属部局・研究科 京都大学農学研究科

職 名・学 年 博士課程 三年

氏 名 KONDO CHIKA

助成の種類	令和4年度・国際研究集会発表助成			
研究集会名	世界農村社会学会大会2022			
発表形式	<input type="checkbox"/> 招待 ・ <input checked="" type="checkbox"/> 口頭 ・ <input type="checkbox"/> ポスター ・ <input type="checkbox"/> その他()			
発表題目	New Entry Women Farmers in Germany and Japan: Challenging social entrenched gender norms through counterculture			
開催場所	ケアンズ、オーストラリア			
渡航期間	2022年 7月 17日 ~ 2022年 7月 23日			
成果の概要	タイトルは「成果の概要／報告者名」として、A4版2000字程度・和文で作成し、添付して下さい。「成果の概要」以外に添付する資料 <input checked="" type="checkbox"/> 無 <input type="checkbox"/> 有()			
会計報告	交付を受けた助成金額	200,000 円		
	使用した助成金額	200,000 円		
	返納すべき助成金額	0 円		
	助成金の使途内訳	費 目	金 額 (円)	
		航空費	184,188	
		宿泊料	15,000	
滞在費		6,397		
鉄道費	23,280			
		(うち20万円を充当)		
当財団の助成について	(今回の助成に対する感想、今後の助成に望むこと等お書き下さい。助成事業の参考にさせていただきます。) この度助成金をいただき誠にありがとうございました。コロナ禍の影響で国際農村社会学会が2年間も延長されました。京都大学教育財団のお陰で参加できました。			

成果の概要／報告者名 KONDO CHIKA

国際農村社会学会 2022 年は 4 日間の学会でした。この学会は、農村社会学の分野では唯一の世界規模の学会です。世界中から農村社会学の学者が集い、各地域の農村社会学会の代表者も参加します。この学会は 2020 年に開催される予定でしたが、新型コロナウイルスのため、2 年遅れて開催されました。

私はこの学会に初めて参加しました。4 日間の間、オーストラリア、ニュージーランド、アジア、ヨーロッパ、アフリカ、カナダ、アメリカ、チリ、アルゼンチン、そして日本からも多くの研究者が参加したので、私はこの 4 日間でネットワークを大きく広げる機会を得る事が出来ました。三日目は見学ツアーにも参加し、オーストラリアの酪農農場を見学し、オーストラリアの大規模農業を実地調査することもできました。とてもいい勉強になりました。

この学会において、「New Entry Women Farmers in Germany and Japan: Challenging social entrenched gender norms through counterculture」(ドイツと日本の新規就農女性農業者：カウンターカルチャーとジェンダーの役割に対する偏見への挑戦) という題名の研究結果発表を報告しました。全体のセッションのテーマは「農業者の自律性」というテーマで、セッション中全員で 4 つの発表をしました。

ここで、私は女性農業経営者の研究について発表しました。題名のように日本とドイツの女性農業経営者の比較調査です。発表テーマのきっかけはドイツと日本から共同研究資金をいただき、ドイツで女性農業者の調査を行う予定でした。しかし、新型コロナウイルスと京都大学による渡航制限の影響で、ドイツの調査には参加できませんでした。でも、ドイツにいるパイパー氏と共同研究を進めました。2020-2022 年の間、オンラインで打ち合わせをし、研究調査の結果などを交換し、今回の国際農村社会学会で日本とドイツにおける女性農業経営者の研究を発表できました。日本とドイツにおける新規就農の女性農業者で作られたネットワークや就農方法とその動機について調査した成果を報告しました。

私たちのセッションでは、ジェンダーが農家の自律性に与える影響について、活発な議論が行われました。小規模な女性農家が自分たちの市場を確立するのにどんなに苦労しているのか、どのように農業を続けているのか等、多くの質問がありました。いただいたフィードバックをもとに、この同じテーマでジャーナルに投稿する原稿も一緒に作成する予定です。学会期間中、共同研究者と私は議論を深め、論文の構想を練ることができました。学会への参加を通じて、農村研究に携わる他の国々からの研究者と交流する

ことは、将来、国際的な視野をもつ研究者として成長する為に非常に役立つと考えています。

発表の概要：

日本とドイツの農業は、北半球の他の多くの国々と同様、継続的な変化が進んでいる。人口動態や構造的な変化により、農家の規模が拡大する一方で、農業経営者の数は減少している。さらに、農村の過疎化と超都市集中によって、都市と農村の格差は激化の一途をたどっている。こうした状況にもかかわらず、小規模な有機農家を中心に、より持続可能な生活へのシステム変化を求めるカウンターカルチャー運動が拡大している。このニッチな集団の中で、女性農家、特に独立した女性農家が増加しているようである。農業経営の最前線で活躍する女性農家は、歴史的に農家の妻や娘という役割に限定されてきた固定観念に直接的・間接的に挑戦し、土地へのアクセスや生計の立て方に苦心している。現在、日本とドイツで持続可能な農業を実践する新規参入女性農家に、ジェンダー・ダイナミクスや性別役割分担の認識がどのように影響しているか、相互比較分析を行っている。日本とドイツの女性農家への30件の半構造化インタビューに基づき、以下の研究課題を解決したいと考えている。

- 1. 農家経営者の男女比の不均衡を解消することを目的とした国の女性農家援助プログラムはあるのか？
- 2. 日本およびドイツにおいて、女性はどのように土地や農場にアクセスすることができるのか？
- 3. ドイツと日本で持続可能な農業を実践している新規参入女性農家に、ジェンダー・ダイナミクスや性別役割分担意識はどのように影響しているのか？

これまでの研究調査の中で、女性農業経営者にとって個人の意識、世帯内での地位、農村コミュニティとのつながり、集合空間への参加など、様々な形で農業分野における位置があり、そして彼女たちには多様な経験があることが分かっています。ジェンダー平等の問題に取り組むためには家庭内と農業コミュニティ内でのジェンダー的な役割と責任の分担を把握する必要があります。そこでジェンダーに関する暗黙の社会規範などの問題が明確になる可能性がある。